

草刈場貝塚の採集資料について

西野 雅人

はじめに

草刈場貝塚は、千葉市若葉区貝塚町に所在する縄文時代後・晩期の大型貝塚である。貝塚町貝塚群の北端にあって、台門貝塚と併存した後期初頭から晩期前半の拠点集落とみられ、貝層の散布範囲は直径180m以上と、単独では加曾利貝塚の「南貝塚」を上回る。昭和2年の発掘調査で中央窪地の存在が指摘されるなど(酒詰1951)、学史的にもきわめて重要である。かつては畑一面に稠密な貝散布を見ることができ、大型貝塚のスケールを実感できる唯一の存在であったが、近年は土地利用が進んで見えにくくなっている。

令和3年2月1日、草刈場貝塚の掘削工事や貝層の露出(写真1)について千葉市中央区在住の茂木幹夫氏から通報を受け、関係者と調整を行った。茂木氏が状況を把握して遺物を探集したのは1月31日である。後日、過去の採集資料と併せてお借りし、簡易報告を行うことにさせていただいた。当遺跡は千葉市を代表する重要な貝塚であるにも関わらず、公表された資料は乏しく時期や内容は不明な点が多い。破壊の拡大を防ぎ、資料公表の機会を与えてくださった茂木氏に感謝を申し上げる。

1 資料の内容

お借りした資料は、縄文土器547点、土製品・特殊土器3点、石器・石製品14点、須恵器1点の計565点である(第1表)。このほかに動物骨と貝類が若干採集されている。図または写真を掲載したのは縄文土器46点と土器以外の全点である。

(1) 縄文土器

時期ごとの点数は以下のとおりである。

| | | | | | |
|---------|-----|-----|----|--------|------|
| 中期中～後 | 6 | 後期初 | 37 | 後期後～晩 | 1 |
| 中期後 | 9 | 後期前 | 33 | (詳細不明) | 303) |
| 中期後～後期初 | 112 | 後期中 | 41 | | |

中期後葉・加曾利E式後半～後期初頭・称名寺式が主体である。加曾利E式は、E IV式よりも後期段階のいわゆるE V式が中心である。貝のカルシウムや灰が付着したものはほとんどこの時期のものであり、該期の貝層に伴うものが採集資料の主体とみられる。ただし、後期前葉・堀之内式～中葉・加曾利B式もかなりまとまっており、この地点ないしその周辺に遺構や貝層が存在した可能性が高い。中期中葉～後葉はごく少ないと大破片もみられる。後期後葉～晩期もごく少ないと、集落としてはこの時期まで維続した可能性を示唆するものといえる。

主な土器を抽出して第1・2図、写真2～5に掲出した。1～31は主体を占める中期後葉から後期初頭の土器である。1は加曾利E III式土器の横位連繋弧線文系深鉢である。2～15は加曾利E IV式から後期初頭の加曾利E V式の深鉢である。16はこの時期の両耳壺形土器である。17～31は称名寺式土器である。32～40・46は後期前葉の土器である。32～36・38～40・46は堀之内式またはこれに並行する深鉢である。46

は三十番場式か。37はこの時期の鉢である。41～45は後期中葉から後葉の土器である。42・43は加曾利B式の無文鉢、41は曾谷式の深鉢、44・45は後期安行式の深鉢であろう。

写真5は灰が付着する土器片である。1は加曾利E III～E IV式土器の口縁部で内外面と破面の一部に灰色の染みつきがある。土器片圓炉などでも使われたものであろう。2は加曾利E IV式の口縁部で口唇上～内面に灰色の染みつきがある。3は無文土器の口縁で破面を含む全面に白色の灰が薄く付着している。4は底部であり内面に白色の灰が付着している。1と2について意図的に塗られた可能性を検討したが、破面にも同様の染みつきがあることから、破損後に付着したことが判明した。貝灰とは色調が異なっており、由来は不明である。他の貝塚の例も含めて今後の検討や分析の必要がある。

(2) その他

石器・石製品と土製品等がある(写真6)。

石器・石製品は9点ある。1は断面円形の石棒の中間小片である。緑泥片岩製で表面は被熱赤変する。2は撥形、3は分側形の打製石斧である。2は側縁の一方が欠損して分側形に見える。4～6は磨石類である。4・5は平面に広い磨面をもち、4は平面中央がわずかに凹む弱い敲打面、側面と端部にざらつく磨面または敲打面を形成する。5は光沢が顕著である。6は焼け礫に転用された小片である。7は砂岩製の砥石である。大きな板状砥石の破片を再利用したものとみられ、一方の側縁が刃部状を呈する。8・9は大きな石皿の小片である。8は上面が広く深く凹む磨面を形成、下面に窪み7か所をもつ。9は上面が広く浅く凹み、側縁が弱く立ち上がる。

土製品等は3点ある。10は土器片円板である。底部片の周囲を研磨している。11はミニチュア土器である。口縁に突起をもつ。体部に多截竹管による連続刺突意匠文を描き、半截竹管の端部による爪形文が沿う。中期前葉の土器か。12は加曾利E IV式土器の深鉢の口縁部の突起部分である。突起の先端が内側に伸びて嘴状を呈し、左右の円環突起が大きな眼となって内向きの鳥頭形をつくる。脣部から嘴状に伸びる微隆線間に繩文が施されている。

2 まとめ

草刈場貝塚は東京湾東岸の貝塚群を代表する存在であり、とくに大規模な貝塚が集中する貝塚町貝塚群の一つとしてきわめて重要であることは明らかだが、年代や性格を具体的に知り得る資料や情報はごく乏しい。今回、後期初頭から形成されたことが確実になったことは大きな成果である。

今回、道路際まで貝層が存在することが確認されたので、南側の二つの貝層は本来つながっていたか、あるいは開口部が現在の図よりも狭かったことになる。千葉市史(後藤1974)では、草刈場貝塚の年代を中期から晚期としつつも、「繩文後期の遺跡」の項で取り上げている。これまでの採集資料をみても、加曾利E式前半期に盛行した中期大型貝塚であったとは考えにくい。今回の採集資料は、土地利用は加曾利E式後半期にはじまり、後期初頭に大型貝塚=拠点集落となったという見方を補強するものといえる。東京湾東岸の後期大型貝塚群は、称名寺式期に始まる比較的貝層の規模が大きい集落と、堀之内1式期に始まる貝層の規模が比較的小さい集落がみられる。草刈場貝塚は、規模からみて前者の蓋然性が高いことは推察されていたが、今回の資料によって裏付けることができた。

草刈場貝塚は、貝塚町貝塚群という繩文貝塚がもっとも稠密に分布する他に例のない遺跡群(写真7)のなかで、荒屋敷貝塚と並ぶ代表的な存在である。

昭和45年ころに撮影されたとみられる空中写真(写真8)には、貝層の散布状況が白く見えている。畠地の区割は貝層に形に沿っており、遺跡の全体が良好に保存されていたことがわかる。中期を代表する荒屋敷貝塚は「貝塚トンネル」の上に保存され、国指定史跡となっているが、後・晚期の二つの貝塚のうち、台門貝塚はほぼ消滅してしまった。草刈場貝塚とその周辺も開発が進み、貝層部分についても、地下への影響が限られる開発が続き、今回のような破壊も起きている。

貝塚群全体の広大な土地について、開発を制限して遺跡を保護することは望むべくもなかつたというのがこれまでの経緯であるが、草刈場貝塚が保護・活用すべき貝塚であることは今も変わりはない(千葉県教育委員会2021)。貝塚が多いことを地域の魅力として喧伝している千葉県や千葉市にとって、多いが故の困難をいかに乗り越えていくかが今後の大きな課題である。個々の貝塚の個性を明らかにしていきながら、貝塚の多様な魅力を活かす工夫、また、地域の住民や児童・生徒に魅力を伝える努力を続けていく必要がある。

さいごに

茂木幹夫氏は群馬県出身、千葉市中央区在住。民間企業在職中の2016年4月に明治大学文学部考古学専攻に学士入学し、2019年3月に卒業されている。現在は長年ご自身で採集された資料や購入した資料の整理や補修を精力的に進められている。今回の採集にあたっては、発見当日が日曜日であったことから、市の担当者への連絡より前に緊急避難的に行ったとのことである。いただいたお手紙に配慮のお気持ちが現れていた。後日の状況から考えると、茂木氏が採集していなければ今回の公表は叶わなかつた可能性が高い。改めて感謝の意を表するとともに、公表が遅れたことをお詫びしたい。なお、おもな資料は、千葉市埋蔵文化財調査センターミニ企画展(令和4年8月26日～9月30日)で展示を行つた。

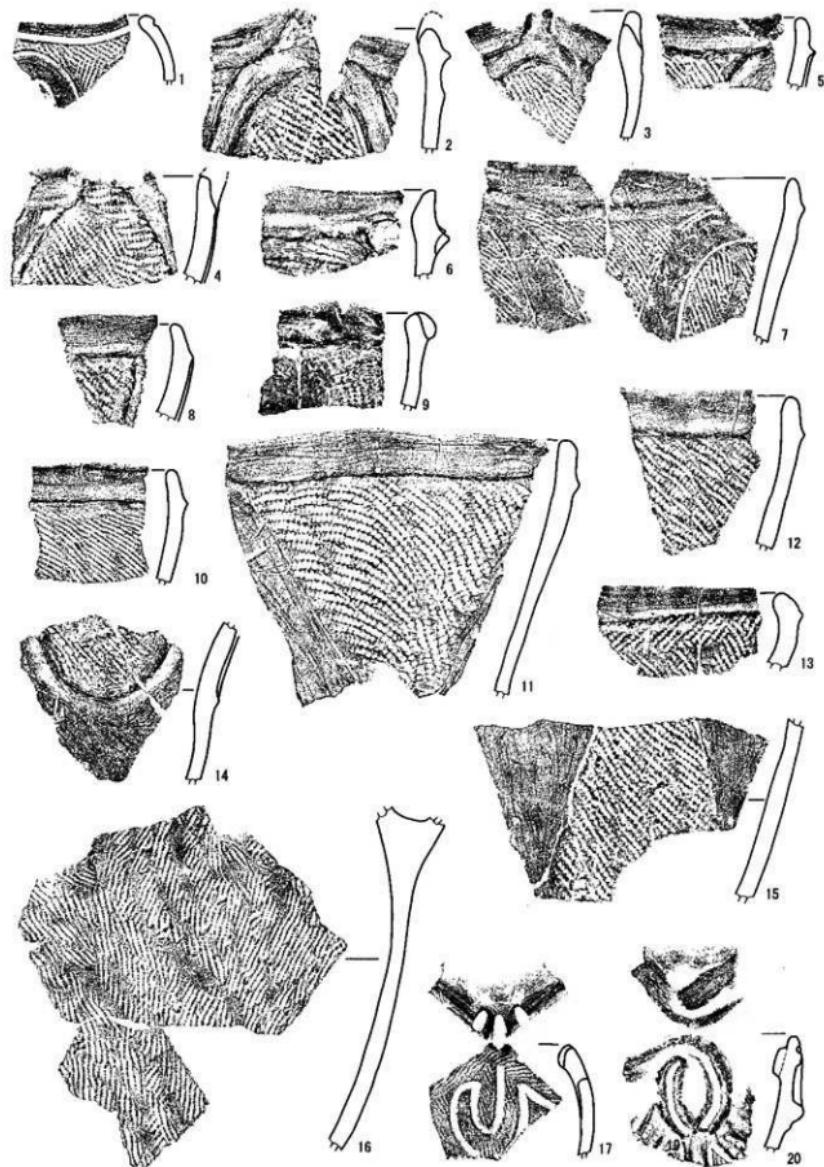
引用文献

- 後藤和民1974 「草刈場貝塚」『千葉市史 原始古代中世篇』千葉市
酒詰仲男1951 「地形上よりみたる貝塚」『考古学雑誌』37
千葉県教育委員会2021 『千葉県内縄文時代集落・貝塚詳細分布調査報告書』

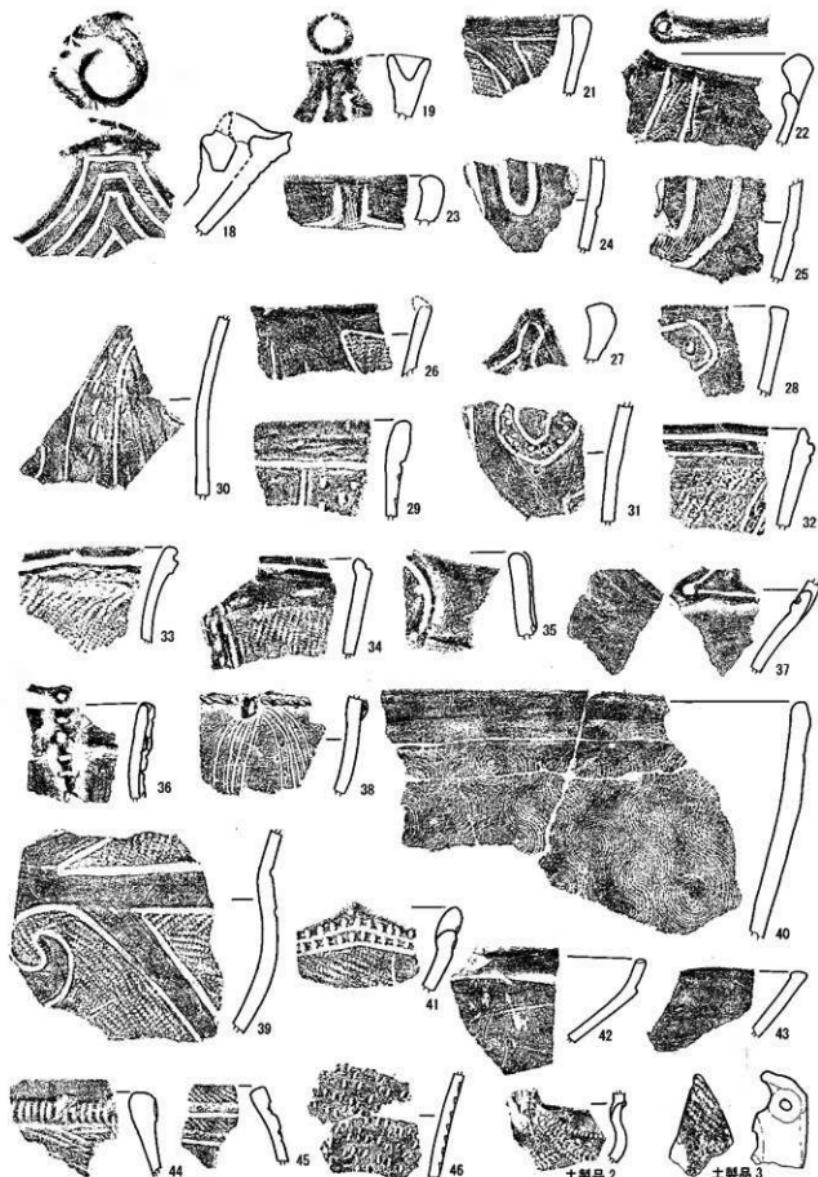
第1表 採集資料一覧

| 区分 | 種別1 | 種別2 | 点数 | 区分 | 種別1 | 種別2 | 点数 |
|---------|-------------|--------|------|----------|---------|------|----|
| 縄文土器 | | | 547点 | | | | |
| 中期中～後 | 加曾利E II～III | | 6 | 詳細不明 | 無文 | 口縁 | 10 |
| 中期後 | 加曾利E III | | 9 | 詳細不明 | 沈縄のみ | 口縁 | 11 |
| 中期後～後期初 | 加曾利E IV～称名寺 | 突起 | 7 | 詳細不明 | 縄文のみ | 口縁 | 25 |
| 中期後～後期初 | 加曾利E IV～V | 微隆起・調 | 45 | 詳細不明 | 無文 | 脚付土器 | 1 |
| 中期後～後期初 | 加曾利E IV～V | 微隆起・口縁 | 40 | | | | |
| 中期後～後期初 | 加曾利E IV～V | 縄文のみ | 2 | 土製品・特殊土器 | | | 3点 |
| 中期後～後期初 | 加曾利E IV～V | 両耳置 | 2 | | 土器片円板 | | 1 |
| 中期後～後期初 | 加曾利E IV～V | 沈縄・口縁 | 9 | | ミニチュア土器 | | 1 |
| 中期後～後期初 | 加曾利E IV～V | 次痕・崩 | 7 | | 鳥頭形突起 | | 1 |
| 後期初 | 称名寺 | 縄文 | 22 | 石器・石製品 | | | |
| 後期初 | 称名寺 | 列点文 | 15 | | 打製石斧 | | 2 |
| 後期前 | 縄之内 | | 33 | | 磨石類 | | 3 |
| 後期中 | 加曾利B・舊谷 | | 41 | | 砾石 | | 1 |
| 後期後～晩 | 安行 | | 2 | | 石皿 | | 2 |
| 詳細不明 | 無文 | 胸部 | 66 | | 石棒 | | 1 |
| 詳細不明 | 無文 | 底部 | 40 | | 櫛 | | 5 |
| 詳細不明 | 沈縄のみ | 胸部 | 39 | 縄文時代以外 | | | |
| 詳細不明 | 縄文のみ | 胸部 | 111 | | 須恵器 | | 1点 |
| 詳細不明 | 縄文のみ | 底部 | 4 | | | | |

2023年3月



第1図 桃文土器(1) 1/3



第2図 縄文土器(2) 1/3

2023年3月



写真1 貝層露出状況

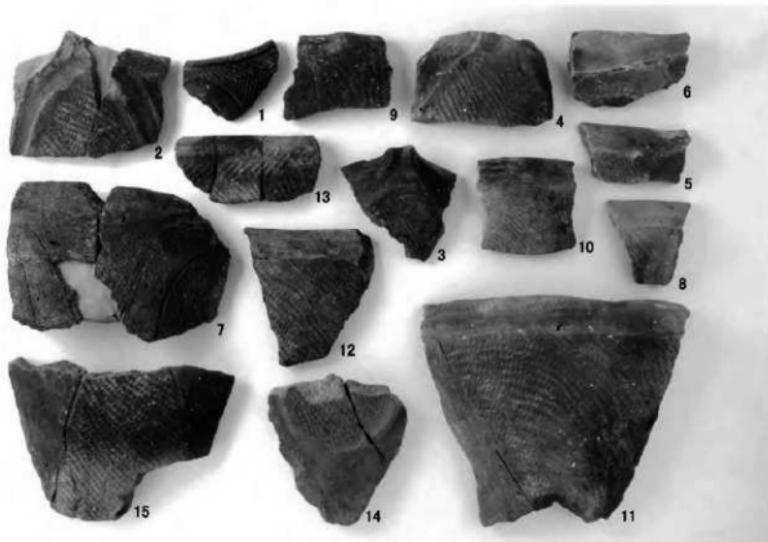


写真2 繩文土器(1~15)

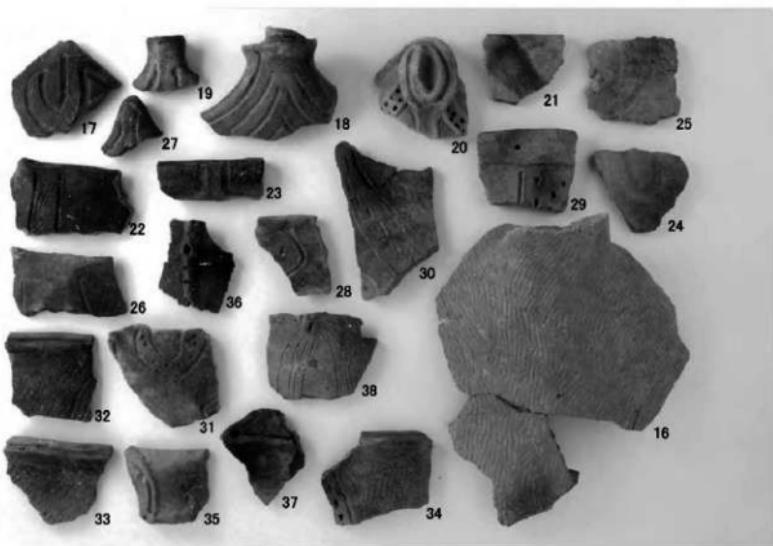


写真3 繩文土器(16～36)

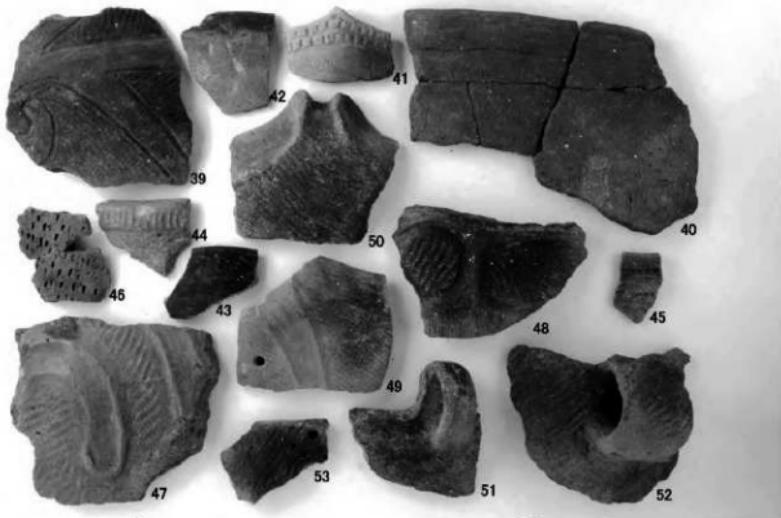


写真4 繩文土器(39～53)

2023年3月



写真5 灰が付着した土器

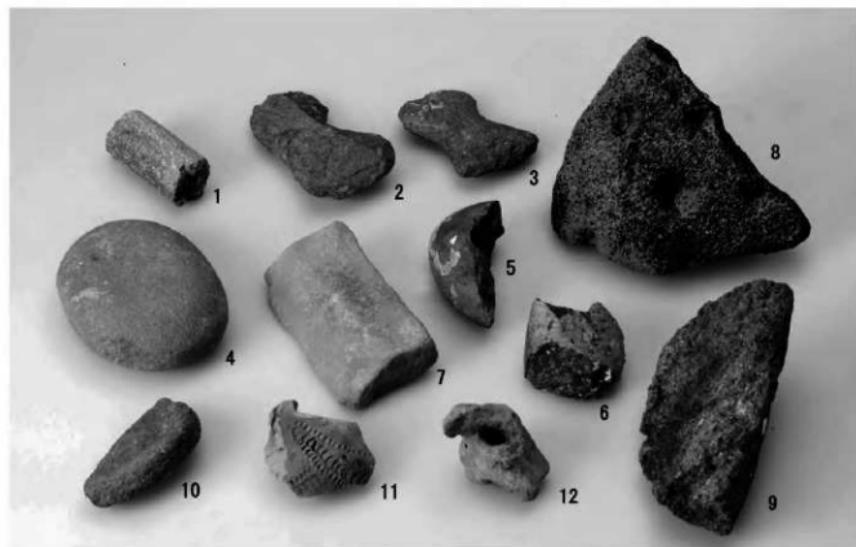
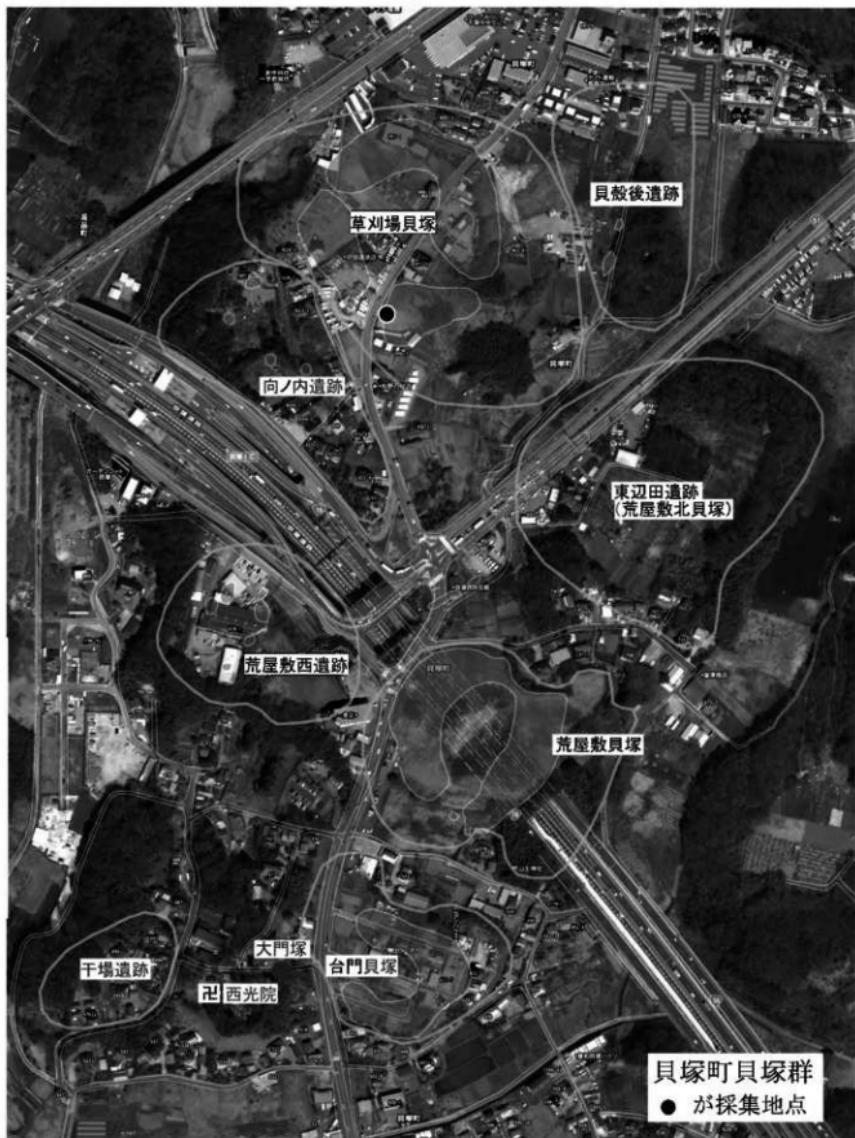


写真6 土製品、石器・石製品



画像 ©2022 CNES/Airbus, Digital Earth Technology, Maxar Technologies, Planet.com, 地図データ ©2019 Google

写真7 貝塚町貝塚群の現況(グーグルマップに遺跡・貝層等を追加)



●は今回の遺物採集地点

写真8 昭和45年ごろの空中写真